

# 会 議 録

日 時	令和3年2月25日(木) 14:00~15:30
場 所	総合文化センター 視聴覚室
件 名	令和2年度 第6回社会教育委員会定例会
出席者	社会教育委員：有賀秀雄、小栗正敏、酒井周文、安藤徳善、岩島留美子、 小木曾恵美、 伊藤孝一、浅沼克郎、牛島正治 欠 席：安藤隆宏、山田秀樹 市関係者：小栗茂(中央公民館長)、吉村美信(統括コーディネーター) 事務局：工藤剛士(同課長補佐)、野田祐作(同主査)
議 題	<p><b>1 挨拶</b></p> <p>有賀 秀雄 代表</p> <p>季節が巡り、春らしさを感じられるようになってきた。「半分、青い。」のロケ地にもなった旧瑞浪小学校の丘の下、万尺川の川辺に河津桜が植えてあるが、先だって一輪、二輪と咲いていたものが、昨日は10輪ほどに増えていた。心が軽くなるような話題がある一方、コロナ禍の脅威が間近に迫っており、思うように出歩くこともできない日が続いている。市内では幼稚園や病院でクラスターが発生したが、特に幼稚園では保育士、園児、そして児童と連鎖したこともあって、先生たちも神経を尖らせているようである。本会にも現役の先生が参加されているが、それぞれの状況に応じた対策が必要であり、大変だと思う。前々回、前回にかけて釜戸小学校、稲津小学校におけるコミュニティ・スクール化に向けた取り組みをお話いただき、学ばせていただいたが、今回はそれぞれの実践の中から成果として挙げられるもの、課題と言うべきものを今一度、整理してみたいと思う。そして、社会教育委員会としてどのようなことを考え、提案していくのか、また、委員個人としてどんなことができるか。時間に限りのある中だが、皆さんの活発な議論に期待したい。</p> <p><b>2 地域と学校の連携・協働に向けたづくり</b></p> <p>代表 会議で話し合われたことについては、各自メモをとられていると思うが、共通理解を深めるために過去2回分の議事録を用意してもらった。まずは黙読の上、その後の議論につなげていただきたい(以後、10分間の黙読)。</p> <p>委員 前回の委員会を欠席し大変申し訳なかったが、稲津小の取り組みについてはその後、校長会の中でお話を聞かせていただいた。現状を振り返ると、市内の学校はいずれも「地域の力」を取り入れており、「地域に出かけて学ぶ」というスタンスが既に位置づいていると思う。これは本当にありがたいことである。また、だからこそ新しく何かを始めるという視点ではなく、今までやってきたことをいかに組織化し、連携しやすい体系づくりを進めるかという形で考えることが大事ではないかと思う。言い換えれば、よりスムーズかつ効果的に、学校、地域、子ども、保護者が繋がれる仕組みづくりこそが、コミュニティ・スクール化に向けた取り組みだと言えるだろう。</p> <p>一方で課題となるのは、稲津・釜戸の両小学校が挙げられたとおり、周知だと思う。地域の方々の中で、「学校のことは学校でやるべき」という認識は、非常に根強い。そこをいかに変えてもらい、「地域と学校で子どもを育てる」という意識を定着させるか、しっかりと考えていかなければならない。</p>

- 委員 同感。釜戸にも稲津にもそれぞれ地域性があるので、「どちらが正解」ということはないが、地域の実情に併せながらコミュニティ・スクール化が進められていると思う。「無理をせずに…」と言えば、逆に無理をしてしまうのが日本人の傾向ではあるが、それぞれ忙しい中で時間を割くわけなので、地域ぐるみで子どもを育てることの意味や目的に対してしっかりした共通理解を持っておくことは、無理なく進めるためにも必要だと思う。釜戸小の説明は、課題点が明瞭にまとめられており、分かりやすい。
- 委員 「無理が無いように」という所では、瑞浪市の公民館や集落支援員等も一生懸命動いてくださっていると思う。学校からではなく、公民館や地域からの働きかけもある。この辺りを、うまく組織づくりの流れに乗せていく事ができると良いかもしれない。また、新しい事業を立ち上げるとなると、どうしても「面倒だ」という意識が働く。であれば、既存の活動の上に、学校と連携することで新たに生じるメリットや付加価値を上乘せしていくことが効率的ではないか。例えば、子ども達と一緒に活動することが高齢者の楽しみや励みになる等である。校長会も積極的に活用してはどうか。2つの学校の実践をお聞きすることで、「なんとかなるな」という気持ちになった。今般のコロナ禍で、計画が先伸びることは仕方ない。全ての学校でいい形が作れるように、焦ってひずみを生じないように、着実に進めていただけたらと思う。
- 委員 稲津、釜戸、日吉、陶、大湫にはそれぞれの公民館が学校とつながって、非常に良い実践ができていていると思う。対して、土岐、瑞浪、明世地区はまだまだ、これから進めていかなければならない。その上で、「なぜ、地域ぐるみで子どもを育てるのか」について、理解を広げていくことは大事だろう。幼稚園で高齢者と園児がふれあう様子を見ていていると、高齢者には子ども達と関わりを持つことが張り合いとなり、子どもには「自分は大切にされている」ということを、実感できる場になっていると感じる。「協働は楽しいことだ」という所から入っていくといいのかなと思う。
- 委員 コミュニティ・スクールの必要性は、自ら関わってみて初めて分かるものだと思う。難しいと思われることも回数を重ねれば次第に理解が深まるが、既にある形を活用する方がわかりやすいのは間違いない。個人的な体験では、「更生保護女性の会」等の事業で学校を訪問する際、以前は「学校に煩わしく思われているのではないかと」気になっていたが、この委員会に参加することで、学校がコミュニティ・スクール化、すなわち「開かれた学校」へと進んでいると分かって、にわかには不安が解消された。学校側の求める事が明確に発信されているほど、地域の人にはより参加しやすくなる。コミュニティ・スクール化自体は、今の活動にうまく組み込めばさほど難しくないと学校にも地域にも「やらなきゃ」という意識は十分に芽生え始めていると思われる。課題としては、学校運営協議会（またはその準備委員会）に誰が参画するかが挙げられると思う。既存の組織と衝突しないためにも、どういう組織にしたいという方向性を明確に示し、共有する必要がある。現在、コミュニティ・スクール化の取り組みは各学校が試行錯誤しつつ進めている印象があるが、市内の学校が集まって意見交換するような場があって、そこから課題等を地域サイドに投げかけてもらうのも良いのではないかと。また、以前話し合いの中で「複数の学校区にまたがる中学校はどうするのか。」という話があった。この点は、簡単に進む地区と、つまずきそうな地区とがあるだろう。コロナの影響が長引く中で、この先、話し合いの場を確保すること自体ができるのかという不安もある。委員個人としては、今後、北中の取り組みに携わらせていただく中で、自分なりの案や意見もまとまってくると思う。

委員 コミュニティ・スクール化はやらざるを得ないこと。結論から言えば、地域学校活動推進員を、それぞれの地域で委嘱することが大事ではないか。国庫からの補助もある。誰に委嘱するのかという問題はあるが、中心となる人物を配置するのが、スタートライン。学校運営協議会、地域学校協働活動両方の中心になってもらえればと思う。

委員 「地域と学校の連携と協働」という課題が提起された時、地域の方々から最初に寄せられた反応は、「コミュニティ・スクールとは…?」「地域と学校の協働とは…?」「学校のことなのに、どうして学校で解決しないの?」といったものだったと思う。そこから準備を進めるうちに、少しずつ理解が進んだ、というのが現在地点だろう。ただ、「なぜ?」という疑問は、この先もまだまだ折にふれて頭をもたげると思う。そこで「こうだ」という理由を、常に明確に説明できるようにしておく必要はある。コロナ禍の影響がある中で、当初の計画通り、所定の年度から全ての学校で完ぺきな組織運用を行うことは無理かもしれないが、準備ができた所から始め、その中で良い所見つけをし、アピールしていけば、次第に理解は深まっていくと思う。そういう意味でも、連携の成果をしっかりとキャッチし、周知していくことは大事だと考える。横断歩道で歩行者を待っていると、おじぎをしながら通っていく子ども達がいるが、こうしたことも地域活動が十分に浸透した成果であると感じる。

委員 稲津の事しか分からないため恐縮だが、昨年度まで校長を務められていた伊藤先生が社会教育委員会に加わってくださり、かつ現職の田口校長先生もしっかり引き継いで精力的に動いてくださるお陰で、ある程度、先を見越した形ができてきたと感じる。従来の学校評議委員会は、形だけになってしまう部分もあったが、学校運営協議会へ移行するにあたっては、メンバーを幅広く集めてもらった上、これまでに培ってきた基盤を活かすこともできそうなので、本年2月に素案ができてきた時も、抵抗感なく「やれるのでは」という雰囲気になった。

町内へのPRについては、学校も色々工夫をされている一方、まだまだだとは思う。コロナ禍によって区長会で触れることはできなかったが、まちづくり推進組織の会議では校長先生に説明をいただき、その後は資料を全戸配布してもらった。現役子育て世代の保護者には浸透してきたが、それ以外の方々にはまだまだ周知が必要である。慌てずに、あるもの活かしをした組織づくりという前提であれば、少なくとも稲津町においては何とかできるのではないかと考えている。

代表 皆さんのお話では、成果より課題の方が多く出てきた印象を受ける。先にご説明をいただいた釜戸小及び稲津小以外の動向については、吉村統括コーディネーターが把握されているのではないかと思います。学校運営協議会の設立に向けて、準備委員会を立ち上げる努力を…と要請されているそうだが、学校によって、取り組みに差があるとも、順調に進んでいるとも聞く。どのような状況か、説明していただけるか。

統括C この1年、色々な会に立ち合わせていただいたが、コミュニティ・スクールについて言及すると「あー」という反応が返ってくる。口コミで広まっている印象を受ける。学校評議委員会に立ち合わせていただいた際も、大概はご理解いただいている感触で釜戸小や稲津小の先行事例を基に準備委員会の設立に向けた動き出しが必要だろうという前提で話が進んでいる。ただ、人数を絞ってネットワークを軽くしたいという方向性を感じ、「小学校と中学校の合同で準備委員会を立ち上げてはどうか」という話が挙がっている地区もある。また、先日は瑞浪北中学校の学校評議委員会に立ちあわせていただいた。ご存知のとおり、北中は複数地区にまたがる学校区を持つため、学校運営協議会も、それぞれの地区で設立する方が現実的だということでもとまって

いた。学校運営協議会の設立にあたっては、やはり学校評議員会が基盤になると思う。学校運営協議会から準備委員会へ、さらに学校運営協議会へ、と発展させていけたらスムーズかと思う。他方、地域学校協働活動の推進は、まだまだこれからの課題であるように感じる。

委員 地域学校協働活動推進員の委嘱の話は、行政の中で進んでいるか。

統括C 現段階では個人的な構想だが、やはりコミュニティ・スクールの核となってくるとは予想している。先ほど言われたように、誰に委嘱するかが最大の課題だと思う。

委員 核となる人物を定めるのが優先課題。まちづくり組織から出るのか、公民館から出るのか。その辺が曖昧だと、組織の構想が固まってこない。核となる人材が定まれば、組織の在り方も決まってくる。各学校の主幹教諭等と連携をとりやすい人材が地域のリーダーになることで、協働活動の開始はスムーズにいくはず。市の方でしっかりと選定してもらいたい。

統括C 是非そうしていきたいと思うが、行政側では地域の実情をつかみきれない所がある。地域の情報を流していただけるとありがたい

委員 まちづくり推進組織の会長や区長会長に尋ねてみれば、「この人なら」という推薦が挙がってくると思う。各地域の事情はあるが、核となる人材を決めるのが優先事項。また、学校ごとに推進員が何人配置されるかというイメージも、持ってもらいたい。北中のように学校区が複数の地区にまたがっている場合はどうするのか。また、伝統的に言えば稲津町は小里と萩原の2地区に分かれているし、瑞浪地区も7つに分かれている。これを一人で網羅できるか。稲津小と釜戸小の説明を聞かせていただいた時、学校運営協議会の組織構想の中に実働的な機関が盛り込まれていた。人選については今後詰めていただく必要があるが、部会制度を設けている点を鑑みるに、これが実質的に「地域学校協働本部」にあたるものになってくると推測できる。推進員の委嘱については、予算措置を伴うことである。できるだけ早く提言をまとめていかなければ、それだけで協働の開始が1年遅れになりかねない。

委員 スローガンについて。目立つ言葉を考えることも大事だが、内容を行動化した場合にどのようなものかを熟議する必要はないか。また、地域住民に積極的な周知が重要というご意見があったが、どういう方法をとるのが良いか。学校と地域との意識のズレも気になる。一概に「こうだ」とは言わないが、「地域学校協働活動」と聞いて地域の人が学校に色々頼みごとに来るのではないかと、身構える学校もあると思う。このことは、社会教育委員会には校長先生を経験された方も多くいるので、理解していただけると思うが、では、こうした意識をどうやって変えていけばよいか。また、全市的な説明会を設けたらどうかというご提案もあったところ。いずれも実際やってみないと分からないことが沢山あるが、重要なところを挙げさせていただいた。

委員 先ほど申し上げた「今ある活動を充実させていく」ことについて、具体例を申し上げると、ある団体が学校を訪問された際に、その団体が何を目的として活動しており、どのようなメリットがあるか尋ねても、要領を得られない事が少なからずある。特に「例年やっているから」が理由になっている活動は、コミュニティ・スクール化に伴い組織が再編される過程で、ハッキリさせていく必要がある。そうすることで、人数配分の適正化や選択肢の充実化が図れるのではないかと。誰とどのように連携すれば良いか分かる点で、学校にもメリットある。よって「今ある活動」の意義を精査し、突き詰めることも一つの研究テーマになるのではないかと。いずれにせよ、具体的な議論を行って、その成果を提言につなげたい。

代表 例えば募金活動を行う団体が学校を訪問された時、学校側にはまず、「非協力的だと思われたくない。」という意識が働く。この時、子どもや先生を交えて活動の意義を具体的に説明していただけたら学校も安心するし、積極的に協力者を募るなど、より充実した活動を仕組めるかもしれない、というのが、ただ今のご意見の趣旨かと思う。ある時、障がい者が制作した作品の展示会を開催した団体があった。運営にあたり、中学生ボランティアを募集し、集まった中学生に「片付けの協力をお願いしたい」と依頼した。主催者としては、「障がい者が会場で自分の作品を見つけ出し、回収することをサポートしてほしい」という意味だったが、その訓練的な意図が伝わっていなかった中学生ボランティア達は、速やかに片付けるために作品を自分たちで回収し、持ち主に配った。ねらいにズレが生じたのである。こうした事態は、事前にしっかりと話し合いをして、詰めていけば防げたかもしれない。このように、活動を実のあるものとするためには意思疎通をよくし、お互いにズレを生じないことも重要だろう。以上のことを鑑みて、では、どのような「あるもの活かし」のアプローチが考えられるか。3月の社会教育委員会では、それぞれに実例を集めてもらい共有してはどうか。経験豊かな皆さんのこれまでを振り返っていただき、「こうすればよかった」、「こういう風にしたら上手くいった」という事があれば、集めてみたい。また、併せて、住民への周知の方法についても様々なアイデアを集約していきたい。

委員 コミュニティ・スクールの周知については、各地域で集落支援員等も活動しているところで、いずれ浸透していくと思う。しかし、コミュニティ・スクールの軸となって学校と地域をつなぐ人材は、すぐには発掘できない。大至急見通しをつけて、地域を一つにまとめていく必要があるし、そうした人材は市が探さなければ見つからない。以前、コーディネーターの話があった時には、そもそも一人でつなぎ役を担えるような人材は絶対に見つからないと申し上げたが、それは当時、ボランティアかそれに近い待遇だと考えられていたからである。一定の報償を支払い、身分保証が可能ならば委嘱をするべきだし、どうすれば適切な人材が見つかるかを議論すべきではないか。例えば、ここに集まった社会教育委員も候補になってくる。組織を動かすための具体部分を固めないと、何年度からの稼働という計画の履行に見通しが立たない。

代表 地域学校協働活動の実践化に向け、推進員の活躍が必要だという前提はよいとして、その人選の方法について言及することが、社会教育委員の提言として妥当だろうか。必要だ、至急だとは申し上げられるが、それ以上のことは行政の人事に関わることなので、どこまで踏み込めるかが問題だと思う。

委員 コミュニティ・スクール化に向けた住民理解は各地区で進んでいるが、その構想の中に「推進員を選出する」という前提が含まれていないことが気になる。「推進員なしでは成り立たない」ということを、もっと意識づけしていくことが重要ではないか。予算を伴うことなので、早く動き出さなければならない。提言の形としては、「コロナ禍（アフターコロナ）の中で、活動を維持していくためには推進員が必要不可欠だ」という声が各地区から挙がっている」といった形でよい。

代表 推進員を望む声は、各地区の中に当然にあると思う。ただ、人選等に至るところではどこまで踏み込めるのかということがあり、社会教育委員会の議題や提言事項としては扱うことが難しいように感じる。本日参加されている吉村統括コーディネーターは瑞浪市の全地区を統括する立場にあるので、本日、「社会教育委員から推進員を望む声が挙がった」ということをふまえ積極的に検討し、また、各地区から実働に向けた助言を求められた際には、推進員の必要性についても触れていただきたい。

	<p>委員 コミュニティ・スクール化自体が全く新しい取り組みなので、具体的な方向に向かって動き出さなければ、何も形にならないまま、進んでいってしまう恐れもあると思う。行政には、予算化に向けて前向きに動いてもらいたい。</p> <p>委員 現在、市内の各地区に集落支援員が配置されており、学校運営協議会に参画したり、地域と学校の連携に向けた研修を受けたりしている。こうした集落支援員は、地域学校協働活動推進員の候補になりうるか。</p> <p>委員 なりうるとは言い切れない。集落支援員は、コミュニティ・スクールの軸になることを前提に委嘱されているわけではないし、経験や年数等によっては、区長会長やまちづくり推進会長も加わる組織の中で、取りまとめ役を担える保証がない。元校長など地域のことを熟知し、かつ学校の事情もよく知った人材でなければならない。</p> <p>委員 研修に参加させていただいた際には、地域学校協働活動推進員に任用される人材の例として、元自治会役員や元 PTA 役員等が挙げられていた。委員が発言されたように 60 代くらいで地域と学校の両方を熟知した方の就任が想定されているようだった。ただ、「こうでなければならない」という形もないと思う。いずれにしても、多忙な中で大変だと思うが、吉村統括コーディネーターにおかれては、ぜひ、地域への助言を通じた周知や予算の確保など、地域学校協働活動推進員の設置にご尽力願いたい。</p> <p>代表 次回 3 月の委員会は、本日の話し合いの中で洗い出された課題について再度検討し、コミュニティ・スクールの具体をともなった姿を市民の皆さんに周知していく方法を考える方向で議論を進めたい。言葉としては、「あるもの活かし」というワードが何度も出てきたところ。それを実際、どうやって行うのか考えていきたい。</p>
--	--